

被服製作実習の改善策の検討

難波 知子*・成田 千恵*・扇澤美千子**

キーワード：製作実習，授業資料，他教科との連携

1. はじめに

近年の中高家庭科における被服製作実習は、平成元年以降の学習指導要領の改訂を受け、内容・時間ともに削減傾向にある。既製の購入が当たり前になった現在、家庭科の授業で被服製作を取り上げることで自体が疑問視され、より一層この傾向に拍車をかけている。しかし、衣生活を主体的に営むためには、衣服の構造や製作方法、手順を理解するとともに、衣服の管理や選択・購入などを総体的に学ぶことに意義があると思われる。また、被服製作の実習時間が削減される一方で、近年の学習指導要領には、日本文化の一つとして和服を取り上げる記載も見受けられる。それらを受け、中高の家庭科の教科書では、和服の構造や着装方法の内容が盛り込まれるようになった。こうした衣生活分野の内容を教授する家庭科教員には、限られた授業時間数の中で製作実習に加え、和服文化への理解を深める教育内容まで幅広い知識と実践、応用が求められている。

家庭科教員を養成する大学では、幅広い教育内容をカバーするとともに、実習に関する知識や技術をわかりやすく効率的に教授する必要がある。特に被服製作実習については、これまでの調査報告により大学生の技能レベルの低下が指摘されてきた。例えば、速水ら¹⁾は小学校教諭免許取得を目指す大学生を対象に、玉結びなどの基礎的な技能の習得状況を調査し、その習得率が半数に満たないことを明らかにした。また布施谷ら²⁾は家政系の女子短期大学の学生を対象として手縫い技能の実態を探り、半返し縫い、本返し縫い、まつり縫いの理解度や習熟度の低さを報告している。このように製作技能の定着が不十分である現状が垣間見られる一方、和服に対する関心の高まりから、ゆかたの製作実習を履修する学生の増加を報告する先行研究もある。中村³⁾はゆかたの製作実習を履修した学生を対象にアンケート調査を行い、自分で製作したゆかたを着て夏のイベントに行きたいという目的意識をもつ学生が多く、意欲的に製作に臨んでいること、製作を通じて和服の構造や着装などを学び、さらに和服への関心の高まりがみられたことなどを報告している。大学における被服製作実習は、こうした学生の技能低下の問題や意欲・関心に対応しながら、有効な教授法を模索せねばならない状況にある。このような現状を踏まえ、より効率的な教授法として、一部の服飾系大学・家政系女子大学において動画教材やe-learningシス

* : お茶の水女子大学

** : 茨城キリスト教大学

テムが導入され、授業外学習への対応や個々の進度に合わせた学習方法も試みられている^{4), 5)}。

そこで本稿は、中高家庭科の教員養成課程をもつお茶の水女子大学生生活科学部において、洋裁を取り扱う「被服製作実習」と和裁を取り扱う「服飾文化実習」の受講生を対象にアンケート調査を行い、その結果から被服製作における基礎的な知識や技能の習得状況、教材資料の有用性を探るとともに、授業方法の問題点を洗い出し、それにより被服製作実習科目の教授法の改善策を検討することを目的とした。さらに、家庭科の衣生活分野に関する教育内容を幅広く学ぶために、実習科目だけでなく講義科目も含め、他科目との連携の可能性を探り、学習指導要領記載の教育内容を効率的に学ぶ授業づくり及び体制整備を模索することとした。

2. 対象科目について

1) 対象科目の履修状況

本稿では、2016年度前期に開講したA：被服製作実習（家庭科教職必修科目、パジャマ製作）とB：服飾文化実習（生活文化化学プログラム専門選択科目、ゆかた製作）の受講生にアンケート調査を実施した。Aの受講生が7名、Bの受講生が10名、このうち両方の科目を受講した学生が4名いた。いずれの科目もTA（1名）が付き、授業前後の準備や片付け、留学生に対するサポートなどを担当した。

2) 授業方法

授業は2016年4月から7月にかけて15回（1回90分）実施した。どちらの科目も教科書は指定せず、担当教員が作成した資料を各回の授業で配布し、授業の前半に資料を映写しながら、前時の授業の復習を行った上で当日行う作業を説明した。授業時の資料は、A：被服製作実習では使用した市販の型紙の製作手順から、B：服飾文化実習では引用文献^{6), 7)}から授業回毎に図・解説等を作成し、配付した。A：被服製作実習では資料の映写による説明に加え、実物見本を用いて手順や技法等の説明を行った。説明後は各自の製作活動に移らせ、教員が机間をまわりながら個別の質問に対応した。当日の作業が授業時間内に終了しない場合には、次回の授業までに完成させてくるよう宿題とした。B：服飾文化実習では15回目の最終授業にて、ゆかたの着装を実施した。

3) シラバス（授業計画）

A：被服製作実習およびB：服飾文化実習の授業計画を表1に示す。

表1 各科目のシラバス（授業計画）

	A：被服製作実習	B：服飾文化実習
1	ガイドダンス，人体と衣服	ガイドダンス 用具の説明 採寸
2	和服の構成，手縫いの基礎	見積もり 身頃の柄合わせ・裁断
3	衣服製作の手順，ミシン縫いの基礎	身頃のしるし付け 袖の柄合わせ・裁断
4	採寸，型紙の準備	袖の縫い方
5	布地へパターン配置，裁断	背縫い・内揚げ・袖（ミシン使用）
6	しるし付け	衿の裁断・しるし付け
7	芯地貼り，裁ち目の始末	衿つけ 縫い代の始末
8	胸ポケット付け，肩の縫製，襟づくり	衿の裁断・しるし付け
9	襟付け	衿肩開きのしるし付け 衿付け
10	袖付け	三つ衿芯 衿くけ
11	上衣の脇の縫製，袖口の始末，裾の始末	脇縫い・縫い代の始末
12	ボタンホール，ボタン付け	袖つけ
13	パンツの脇，股下の縫製，裾の始末	すその始末
14	股上の縫製，ウエストの始末，ゴム入れ	掛け衿つけ
15	完成作品発表会	着装実習

3. 検討項目

製作実習（A：被服製作実習，B：服飾文化実習）の授業改善を目指し，授業終了後，受講生にアンケート調査を実施した（実施期間：2016年7月21日～8月3日）。調査は調査用アンケート用紙を作成しメールにて配信し，記入後，各担当教員に返信することとした。回収後，さらに授業担当以外の教員が授業に求める学習ニーズや他科目の履修状況について聞き取り調査を行った。

両授業の共通の質問としては，学生の現状把握をする目的で，各授業（A，B）の受講理由や目的，これまでに小・中・高・大学の授業と授業以外で制作した作品について，製作技能レベルの自己評価（5 高い 4 やや高い 3 ふつう 2 やや低い 1 低い），製作に対する意識（製作実習は好きであるに対して 5 そう思う 4 ややそう思う 3 どちらともいえない 2 あまりそう思わない 1 そう思わない），授業以外の作業時間，他履修科目の受講状況等を設定した。授業の改善点，実習を終えた感想等は自由記述とした。

加えて各々の授業で取り扱った内容について，縫い方や部位の名称に対する知識・理解の程度，授業で使用した資料に関してプリント，実物見本等が理解しやすかったかどうか，理解しにくかった説明箇所，やり直した部位について回答させた。また，配布プリントの説明や図に対する評価，実物見本，写真や動画の導入についてその必要性を問い，その理由について記述させた。服飾文化実習に関しては，きものの着装体験についてときものに対する興味・関心の項目を設けた。

4. 結果

4.1 製作実習（A：被服製作実習，B：服飾文化実習）共通の質問

1) 受講理由

受講理由としては、A：被服製作実習では教員養成、衣服を製作してみたい、B：服飾文化実習では、いつか作りたかった、挑戦したい、興味があった、和服が好き、教職の単位として、留学生：韓国の伝統服との違いを知りたいなどが挙げられており、興味・関心の高さが伺えた。

2) これまでに製作した作品

これまでに製作した作品についての回答結果を表2に示す。小学校から大学までの授業内で製作するものは衣服よりもバッグや巾着等が多く、直線的で基礎的なものがほとんどであった。高校以降は製作をしなかった学生もいた。A：被服製作実習の受講生は、ほとんどが授業以外で小物などを何かしら製作しており、特に製作が好きな学生は衣服を複数製作していた。B：服飾文化実習の受講生はA：被服製作実習の受講生よりも、製作経験が少ない傾向にあった。

表2 これまでに製作した作品について（ ）内の数字は回答した人数

	A：被服製作実習		B：服飾文化実習	
	授業で製作	授業以外で製作	授業で製作	授業以外で製作
小学校	バッグ(1)、エプロン・巾着・クッションカバー(2)、ナップザック(3)	編物のマフラー・エプロン・カバン(1)、ぬいぐるみ(2)	ナップサック・クッションカバー・エプロン・お弁当包み(1)	エプロン・ぬいぐるみ・ティッシュケース(1)
中学校	フェルトのおもちゃ・ニット帽・ハーフパンツ・ブックカバー(1)、マスコット・エプロン(2)	ぬいぐるみの服・カバン(1)	ニット帽・ハーフパンツ・クッション(1)、エプロン(2)	ぬいぐるみの服(1)
高校	ティッシュケース・エプロン刺繍・手縫いの練習・弁当袋(1)	スカート・ワンピース・ドレス・キュロット・スーツ・タオルの装飾(1)、シャツ・髪飾り(2)	エプロン刺繍・ズボン(1)	シャツ・ワンピース・スーツ・チュニック・ぬいぐるみ・ポーチ・財布・ブックカバー・ティッシュケース(1)、スカート(2)
大学 入学後		シャツ・ジャケット・ズボン・ペンケース・巾着・定期入れ・髪飾り(1)、ワンピース・ドレス・スカート(2)		スカート・シャツ・ジャケット・ドレス(1)

3) 被服製作の技能レベルと製作実習に対する意識

技能レベルの自己評価（5 高い～1 低い）は、A：被服製作実習の受講生の平均は3.3、B：服飾文化実習の受講生の平均は2.7で、A：被服製作実習の受講生の方が高かった。また、製作実習に対する意識は両科目ともに「製作実習が好きである」に対し、全員がそう思う、ややそう思うのいずれかを回答した。図1に製作実習に対する意識の回答結果を示す。

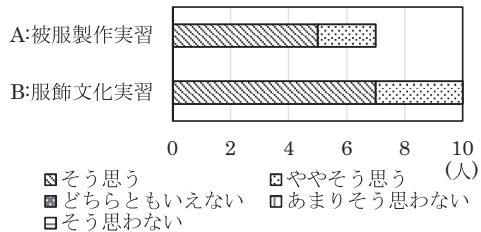


図1 「製作実習が好きである」に対する回答

4.2 被服製作実習の調査結果

1) パジャマ製作の知識と理解

図2に受講前のパジャマ製作の知識（21項目）に関する回答を示す。受講前のパジャマ製作に関する技法に関しては、ボタン付け以外の全ての項目で「知らなかった」という回答が多くみられた。また、「知っていたし自分でできる」という回答が最も少なかったのは「パターン配置」「裁ち目の始末（ロックミシン）」「肩のいせ込み」「ボタンホール」の項目で各1名、「見返しの始末」では0名であった。その理由として次のことが考えられた。受講生7名のうちエプロン以外の衣服を製作した経験がある者は3名であり、残る4名は衣服製作上必要となるこれらの項目に触れる機会がなかったこと、「パターン配置」と「ロックミシンによる裁ち目の始末」については、衣服製作の経験があっても高校までの授業内で製作した者は1名で、他の2名は独学で製作したため、パターンのたて方向と布目線を合わせるという基本的な知識に触れない、あるいは知っていたが重視しないまま衣服製作をしていたこと、ロックミシンは高額で機能も限定的であるため、高校までの授業や家庭内で取り扱う機会が非常に少ないこと、「肩のいせ込み」は、肩にいせ込みを施すデザインの衣服（例えば、スーツやジャケットなど）を製作した経験者は1名のみであったこと、「ボタンホール」は、ボタンホールを開けるデザインの衣服製作をしなかった（5名）、またボタンホールを開けようとしたができなかった（1名）者が多かったことが挙げられる。「見返しの始末」は開きのある衣服を製作する際

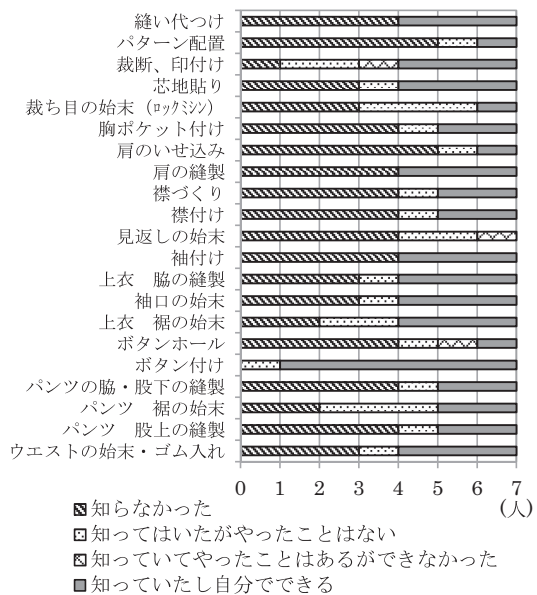


図2 パジャマ製作の技法に関する知識

に必要となるが、「知っていたがやったことはない」が2名、「知っていてやったことはあるができなかった」が1名であることから、見返しの始末を必要するデザインの製作経験がない、あるいは十分な知識のないまま挑戦しできなかったことが明らかとなった。

授業終了後の理解に関する設問では、全ての項目において授業を受けて理解できた、やや理解できたという回答がほとんどを占めるまでになった。どちらともいえないという回答がわずかにみられたが、授業終了後のヒアリングでその理由を問うたところ、説明通りにやったのでできたが、自分一人でやってできるか少し不安なためということであった。以上から、今回のパジャマ製作の授業を受講したことで、製作過程に必要な知識や技法をほぼ理解できたといえる。

2) 資料の評価

授業で使用したプリントの説明について受講生がどのように評価しているか、また、製作中にどの箇所をやり直したかを調査した。検討した作業項目は前項と同様の21項目で、回答は「理解しやすかった」「理解しにくかった」「やり直した」から選択し、どのような点が理解しにくかったか、あるいはやり直したかを具体的に記述させた。図3にその回答結果を示す。資料がわかりにくい理由として、「縫い代つけ」「パターン配置」「胸ポケット付け」「肩の縫製」では「初めてだったので手間取ったこと」が挙げられた。また「肩のいせ込み」では「いせこみの分量がよく分からなかった」「襟付け」では「襟の上下がわかりにくかった」ことが挙げられた。全体の約2分の1の項目でやり直しがみられ、しるしの付け間違いやミシンの不調がその理由であることが多かったが、「肩のいせ込み」では説明を確認せずにいせ込みのためのぐし縫いを身頃側に入れたり、「襟付け」では襟を上下逆に身頃に付けてしまったためであった。これら授業前の知識が低い項目に関しては、製作過程をこまめに区切って説明したり、写真や動画の資料を参考にさせることが必要であると思われる。

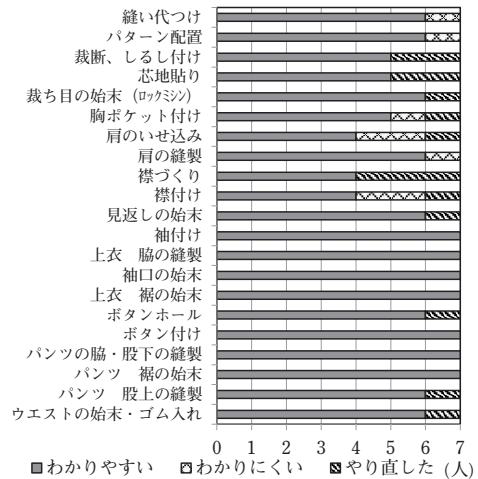


図3 パジャマ製作に関する資料の理解のしやすさとやり直した箇所

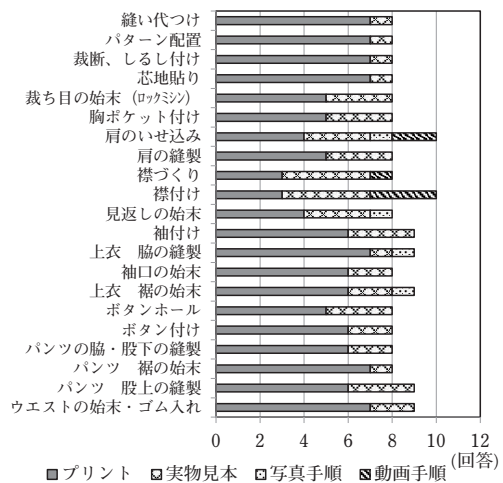


図4 パジャマ製作に必要なとされる資料の種類

3) 授業で使用する資料の改善について

4.2.2) で取り上げた21項目について、「配布プリントの説明や図はわかりやすかった」「実物見本の方がわかりやすい」「写真によって手順を説明して欲しい」「動画によって手順を説明して欲しい」から複数回答で選択させ、さらにその理由などを自由に記述させた。図4に、パジャマ製作に必要とされる資料の種類の数合計を示す。授業では作業開始前に実際に実物見本を用いて製作過程を説明しており、ほとんどの項目でプリントと実物見本が必要という回答であったことから、製作過程はプリント、および見本による説明により理解できたことがわかった。しかし、一度も衣服製作を行ったことがない受講生からは、「全体の流れが分からないため、まず衣服製作手順を一通り動画で見たかった」という意見が挙げられた。また、授業前の知識が低かった「肩のいせ込み」「襟づくり」「襟付け」「見返しの始末」「上衣 脇の縫製」と「上衣 裾の始末」では、製作過程を逐一確認したいという理由から、プリントと実物見本以外に、写真や動画での説明が欲しいという回答が挙げられた。

4) 授業以外の作業時間について

パジャマ製作における授業以外に行った作業時間は個人差が大きく、15回通算で最も少ない学生で30分～最も多い学生で340分であった。項目別では、「第6回 しるし付け」「第7回 芯地貼り、裁ち目の始末」「第9回 襟付け」で約半数が10～60分の授業時間外の作業を行い、「第8回 胸ポケット付け、肩の縫製、襟づくり」ではほぼ全員が15～60分の授業時間外作業を行った。このため、少なくとも第8回の内容は、前後の授業時間に一部の項目を移動するなどの対処が必要であることがわかった。

5) 授業の改善点の提案と実習を終えた感想について

授業の改善については、「衣服製作が初めてのため、裁断やしるし付けから合っているか不安に感じるがあったので、予習をしておけばよかった」「授業時間外に少しでも教員が実習室に在室して質問できるような時間があると良い」「生地を購入する前に生地の特徴などの知識があれば良かった」「次回プリントを事前に配付して予習して来る」という意見が挙げられた。説明プリントの事前配布による予習や、生地購入前の生地の特徴についての解説は、すぐに対処できる項目である。

また、実習を終えた感想では、「少人数で直接教われて楽しい」「知らないことが思っていたより多かったので履修して良かった」「自己流で服をつくってきたので、正しい方法を学べて良かった」「実際に指導を受けながら作業を進められたことは、一人で製作するよりも断然心強く、最終的にはとても楽しく製作できた」「パジャマ製作を通して裁縫の基礎的な技術は習得できたと思うので、また何かつくってみたい」「この実習をきっかけにさまざまな衣服の製作に挑戦していきたい」「裁縫に対してどちらかというと苦手意識を持っていたが、今は最低限のことはできる自信が付き、服を自分でつくってみたいという小さな夢が叶って嬉しい」など、ものづくりの楽しさや達成感を感じることができたことがわかる。

4.3 服飾文化実習の調査結果

服飾文化実習では和裁独特の項目について、まず、縫い方や部位の名称に対する知識・理解の程度、きものの着装体験、きものに対する興味・関心の程度（5 興味がある、4 やや興味がある、3 どちらともいえない、2 あまり興味はない、1 興味はない）を調査した。さらに、授業で使用した資料の理解しやすさ、およびやり直した部位について、配布プリントの説明や図に対する評価、実物見本、写真や動画の導入に対する回答を得た。

きものに対する興味・関心の項目と平均点は、着付け 4.8、色・柄 4.8、「きもの・ゆかた」と帯の組み合わせ 4.9、帯結びのアレンジ 4.7、流行 3.8、歴史 4.1、TPO 4.5、「人生の節目」で着るきもの 4.5で、個人の平均点4.5も高かった。これらは、これまでに行なった調査⁸⁾、⁹⁾と比較しても高い値であった。着装体験についても全員が「あり」と回答しており、きもの学習に対するモチベーションが高く製作実習にも積極的に取り組む姿勢がみられた。

1) 和裁の製作技法について

和裁の製作技法（三つ折りぐけ、耳ぐけ、きせ、本ぐけ）について授業前に知っていたかの回答では、「三つ折りぐけ」「耳ぐけ」「本ぐけ」は9名が知らなかったと答えた。これらを知っていたと答えた学生はすでに和裁の授業を受講していた。「きせ」は3名が知っていたと回答した。

また、各部の名称（8項目）については、「衿」「肩山・袖山」は知っている学生が多かったが「繰り越し」は全員知らなかった。「衿肩開き」「内揚げ」もなじみがないこと

がわかった。和服各部の名称については、学部1年生向けの講義科目において、着装の際に知っておくべき部分名称は説明しているが、製作に必要な名称は取り上げておらず、細かな和服名称を知る機会に恵まれなかったものと思われる。さらに、授業を受けて技法や名称を理解・習得できたかに対する回答では、あまりそう思わないとした学生が「内揚げ」で1名、「繰り越し」で2名いたが、他はおおむね理解できていた。

2) 資料の評価

次に、A：被服製作実習と同様の設問にて、授業で使用したプリントの説明について学生がどのように評価しているか、また、製作中にどの箇所をやり直したかを調査した。その結果を図6に示す。「見積もり」「柄合わせ」「裁断」「衿つけ」「縫い代の始末」「袖の丸み」「裾」は8割以上が資料は理解しやすかったと回答したが、「しるし付け」「肩当て・いしき当て」「繰り越し」「内揚げ」「衿肩開き」「衿付け」「三つ衿芯」「衿先」に関しては半数近くが理解しにくかったと答えた。理解しにくい理由としては、「完成形がまったく見えない状態で行うため、ゆかたの構造や部位の名称を理解していないと、今自分が何を

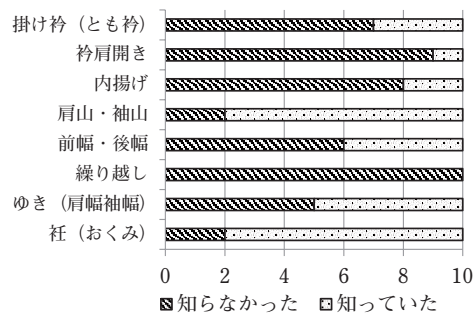


図5 ゆかた製作に関する名称の知識

やっているのか分からない」「衿肩開きのしるしが後々何をするために必要かわからず、どうなっていれば正しいのかイメージしにくかった」等の意見があり、事前にゆかたの構成と部位の名称を理解することが作業の正確さに影響することが示唆された。また、「図の本衿部分がどちらを向いているのかが分かりにくかった」「三つ衿芯はプリントの図だどこの布がどういう順で重なっているのかわからず、混乱した」「袖の縫い代を折りだすところが全くわからなかった」等、細かな操作が多い場合、プリントの図と文章だけでは理解しにくい箇所があったのがわかる。

やり直した箇所としては、「しるし付け」が5名と最も多く、「印がつきにくくすぐ消えてしまった」「印がちゃんと残るようなペンを使えばよかった」等、生地によってはへらを使用したしるしがつきにくい、消えやすいということわかった。次いで、「衿つけ」は「しるしが見えなくなってしまって縫う場所を間違えた」2名で、しるし付けの不備が原因でやり直していた。「肩当て・いしき当て」「縫い代の始末」「衿肩開き」「衿付け」「三つ衿芯」「掛け衿付け」「袖つけ」「袖の丸み」は、各1名やり直していた。「繰り越し」の作業は理解しにくい箇所ではあったが、全員が同時期に実践しており、やり直しはなかった。衿の裁断では見積りめの段階で長さを間違えて裁断した例があったが、別布を足すなどして修正した。内揚げの位置については説明が十分でなく指導者のチェックが行き届かなかったことも重なり定位置より低い位置になってしまった学生がいたが、脇の始末も終わっていたことから、やり直しせずそのまま進行させた。

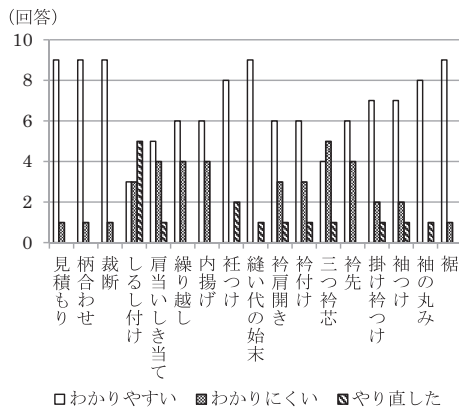


図6 ゆかた製作に関する資料の理解しやすさとやり直した箇所

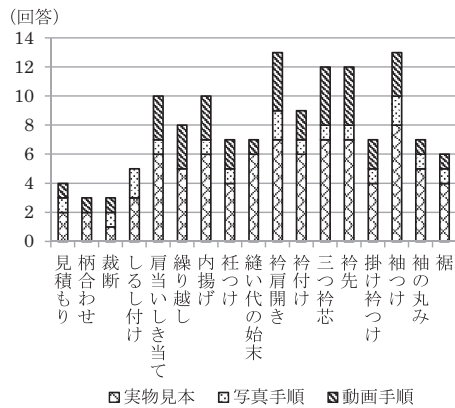


図7 ゆかた製作に必要とされる資料の種類について

3) 授業で使用する資料の改善について

さらに、予習のための事前の資料配布、復習のための動画・写真による解説の活用を検討するため、ゆかた製作に必要とされる資料に関して調査した。図7には各項目について「実物見本の方がわかりやすい」「写真・動画によって手順を説明して欲しい」と回答した数の合計を示した。

「見積もり」「柄合わせ」「しるし付け」「衿つけ」「掛け衿付け」「裾」については7名が、

「裁断」は8名が授業で使用したプリントの説明や図はわかりやすかったと回答したが、4.3.2)で行った配布プリントの図や説明についての調査結果からは、細かい点での理解が十分ではなかったことがわかる。さらに、実物見本の方がわかりやすいとの回答は、「肩当て・いしき当て」「繰り越し」「内揚げ縫い代の始末」「衿肩開き」「衿付け」「三つ衿芯」「衿先」「袖つけ」「袖の丸み」で半数以上となり、「裏返したり折り返したりと、操作が多いところなので作業工程や、完成形を把握した上で進めたい」「三つ衿芯は布が何枚も重なっていたので、図だけだと曖昧で、合っているか不安だった」「袖がどうやって丸くなるのかイメージしやすくなると思う」等、多くの箇所でのプリントの表現では理解しにくいと感じていた。また、しるし付け以外の箇所では動画によって手順を解説して欲しいが選択されており、「衿肩開き」「袖つけ」「衿付け（衿肩開き、三つ衿芯、衿先）」に関する箇所はプリントの説明では手順がわかりにくく、「図だけだと手順をイメージしにくかった」「袖の縫い代出しが場所によって違うというのが複雑だった」「衿付けの待ち針はどこに針を刺せばいいかわからなかったので、遅れている人もいつでも見られるように動画があればよい」といった意見が出されたことから、手順が複雑な箇所、なじみのない部位の説明には動画が必要であることが示された。「実物見本で説明しながら、予備として画像も配布してもらえると先生がなかなか回ってこれられないときも待ち時間なく、進めることができる」との記述からも、実物見本や動画の重要性が伺えた。

4) 授業以外の作業時間について

ゆかた製作における授業以外に行った作業時間を検討すると、前半は裁断、しるし付け等、実習室での作業が必須だったので授業中に終了する学生が多かったが、中盤になると作業の進行に差が生じ、時間内に終わらないところは次時までの課題となり作業時間が増えた。各自の授業以外の作業時間を比較すると最短450分、最長1300分で、総時間数を平均すると1人が毎回56.6分を費やしていた。授業以外の主な作業内容としては肩当て・いしき当ての作製、袖、三つ折りぐけ（衿下、袖口、裾等）、縫い代の始末（衿、脇縫い等）、衿の本ぐけ等があげられるが、三つ折りぐけ、縫い代の始末、衿の本ぐけはくける距離が長く時間がかかっていた。しかし、ゆかたの完成形が想像できるようになると終盤の作業ペースは上がった。

5) 授業の改善点の提案と実習を終えた感想について

授業の改善点としては、「授業の作業工程が多かったので、説明と作業の時間を一度の授業内で何度か繰り返せるといい」「授業時に先生の実践が見られると分かりやすい」「ゆかた文化に馴染みがないので名称がわからない」「遅れている人もいつでも手順を確認できるように、カラーの写真付きでインターネット上にあげてほしい」等が挙げられた。今後の授業改善に向け、説明のタイミングや実物見本を使った師範、写真や動画をインターネット上に掲載する等の検討課題が明らかとなった。

実習を終えた感想としては「ゆかたの形になって、達成感を味わうことができた」「後半は少しずつゆかたらしい形になっていくのが嬉しく、完成が楽しみで、完成前にも何度も着てみた」「何度も間違えてほどいてを繰り返して心が折れそうになったけれど、おくみ

がついてゆかたらしさが出てからやる気が増した」「韓国ではできない経験をし、興味深くとても楽しかった。完成度よりもゆかたについて色々知ることができて、とても充実した時間だった」等、製作の苦労は多かったが、終了時の達成感も大きかったことがわかる。

5. 考察

5.1 問題点と改善策

以下、アンケート調査と聞き取り調査の結果から明らかとなった主な問題点とその改善策について検討する。

まず、A：被服製作実習（パジャマ製作）は、受講者に被服製作が全く初めての者から何度も製作経験をもつ者までさまざま含まれており、既習の知識及び技術、さらに学習目的や学習ニーズに違いがみられた。製作経験をもつ学生の中には、パジャマという教材に物足りなさを感じる者も若干名いたが、ほとんどは小物製作を経験したことはあっても被服製作については初めて取り組む者で、学習ニーズとしては基礎的な知識及び技術の理解や習得が第一に求められていたといえる。また製作経験がある学生についても、改めて基礎的な内容を学ぶことにより、それまでの自己流の方法を見直す契機にもなっており、本科目において被服製作の基礎を重点的に扱う必要性が確認できた。教授法の改善策としては、被服製作初心者の学生が多いことから、ほぼ全ての工程に実物見本を用意し、さらに製作手順がわかりにくいとの回答があった「肩のいせ込み」「襟づくり」「襟付け」「見返しの始末」「上衣の脇の縫製」「上衣の裾の始末」については、写真もしくは動画教材を併せて使用することが望ましい。さらにアンケート調査における資料の理解のしやすさ及びやり直した箇所の回答の結果を受けて、実物見本や写真・動画教材を作成する場合には、野沢の報告⁴⁾にあるように、布地の表裏、左右、上下などがわかりやすいように部位により布の色を変える、縫い目を強調するために布と糸の色を変えるなどの工夫を行なう必要性が挙げられた。

次にB：服飾文化実習（ゆかた製作）については、1名を除きほぼ全員が初めての和服製作であった。多くはゆかたの構造や各部位の名称の理解度が十分でなく、そのために作業を開始するまでに時間がかかったり、やり直しをしたりすることが見受けられた。部位名称については、実習を受講する前に他科目と連携して事前に理解を深めておく必要性が認められた。製作実習は2年生からの履修としているため、和服の基礎知識は1年生対象の「被服学概論」（家庭科教職必修科目）もしくは「服飾美学概論」（生活文化学主プログラム必修科目）において、製作する際に必要な部位名称を学習内容に取り入れたい。さらに本科目の初回授業においても、ゆかたの雛形などを使用して和服の基礎知識を復習し、作業開始までにしっかり知識を定着させておく工夫も考えられる。

またAのパジャマ製作に比べBのゆかた製作は、製作に必要な知識や技術、作業工程や製作にかかる時間が多く、個人の作業進度や授業時間外での作業時間に大きな差がみられた。手縫いで進める分量が多く、学生それぞれの技能レベルの差に加え、遅れをどこで取り戻すかといった作業の計画性なども影響したと考えられる。これらの問題については鈴木の研究における授業プロンプト¹⁰⁾を参考に、進行表を作成し、全体の流れを学生に把握させるとともに、各回の授業後に進行状況を記入させ、授業担当者が個々の進捗をチェッ

クする体制を整えたい。併せて、全体での説明と個人の作業進度が著しく乖離してしまった場合や授業時間外での作業をより正確に進めるために、各工程の製作手順が確認できる実物見本や写真・動画教材の整備を検討したい。特にアンケート調査により理解しにくかったとの回答があった「しるし付け」「肩当て・いしき当て」「繰り越し」「内揚げ」「衿肩開き」「衿付け」「三つ衿芯」「衿先」については理解しやすい教材資料の整備、いつでもどこでも何度でも確認できるよう教材資料のインターネット上での公開が有用であると思われる。なお、受講生が希望する資料については、各自がそれぞれの項目に対して個別に判断しており、希望する資料に個人の好みの傾向は見られなかった。

5.2 今後の課題

今後、上記に示した授業の改善策を実行に移すにあたり、さらにいくつかある課題をまとめておきたい。実物見本については、授業中に提示する他、授業時間外でも学生が手にとって確認できるよう実習室に常備する必要がある、学習しやすい実習室の環境整備にも取り組みたい。また自宅などで作業する場合に対応するため、教材資料のデータをウェブ上に蓄積し、いつでもどこでもアクセスできる学習体制の整備が求められる。大学で提供されている学習支援システム（お茶の水女子大学教育開発センターのPloneやMoodle、茨城キリスト教大学のCoursePower等）を活用し、教材資料のデータのアップロード、授業進行表の入力（学生）・確認（教員）、授業アンケートの実施など多方面の使用を検討したい。

さらに、洋裁・和裁の各実習科目及び服飾系の講義科目を担当している教員間で情報共有を行い、互いの授業の有機的連関を図るとともに、学生からの質問に対し、授業担当者以外の教員でも対応できるようシラバスや教材資料の開発・整備を共同で進めていきたい。教職科目と服飾系の専門科目を連携させることにより、家庭科教職の履修者にとっては幅広い教育内容を過不足なくカバーすることが期待でき、さらに服飾領域の専門科目の履修者にとっては、家庭科の衣生活分野で取り扱われる内容を基礎的教養として身につけ、さらなる学習へ結びつけることが期待できる。限られた授業科目・単位数の中で、教職や専門教育の双方にとって効果的な学習機会や充実した学習内容を提供するために、教授法のさらなる改善に取り組んでいくことを今後の課題とする。

文献

- 1) 速水多佳子, 黒光貴峰 大学生の家庭科における調理, 被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題 日本家庭科教育学会誌, 57(1), 14-21, 2014
- 2) 布施谷節子, 高部啓子 家政系女子大生における手縫いの技法の実態 被服製作の知識と過去の経験との関連性, 日本家庭科教育学会誌, 43(4), 273-278, 2001
- 3) 中村邦子 浴衣の製作実習に関する意識調査 大妻女子大学家政系研究紀要, 50, 75-79, 2014
- 4) 野沢さおり, 小出恵, 井上昌恵, 佐藤綾, 佐藤美雪 被服構成実習における動画教材の活用 文化女子大学紀要 服装学・造形学研究, 109-121, 2009
- 5) 田中早苗, 高久舞衣 被服実習におけるLMS導入の実践と評価, 東京家政大学研究紀要, 54, 35-39, 2014
- 6) 熊田知恵, 森田萬里子, 古松弥生, 秋山真紀子 和服の基礎とゆかた製作 創英社 2003
- 7) 土井幸代 和裁 同文書院 1990

- 8) 扇澤美千子, 川端博子, 加藤順子, 薩本弥生, 齊藤秀子 ゆかたの着装体験を組み込んだ総合的な学習の時間の授業分析 埼玉大学紀要 教育学部, 62(1), 1-12, 2013
- 9) 扇澤美千子, 川端博子, 仲田郁子, 薩本弥生, 堀内かおる, 齊藤秀子, 呑山委佐子 ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み-少人数制を導入した授業の効果- 埼玉大学紀要 教育学部, 61(2), 1-14, 2012
- 10) 鈴木明子 被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討 日本教科教育学会誌, 26(3), 33-40, 2003

Consideration of the Improvement Plan for Practical Trainings in Clothing Construction

NAMBA, Tomoko NARITA, Chie OUGIZAWA, Michiko

Keyword: clothing construction practice, teaching materials, liaison with other subjects

Through a questionnaire survey conducted on students participating in the Practical Training Course for Clothing Construction (Western Dressmaking: sleeping wear and Japanese Dressmaking: yukata) at Ochanomizu University in 2016, we sought to explore the level of the students' basic knowledge and skills in Clothes Making, and to consider measures to improve teaching methods that were found insufficient.

Results revealed demands for the use of actual samples to enable better understanding in the structures of clothing, and photographs and video materials to confirm the manufacturing steps that could not be fully understood through drawings and texts in hand-outs. These teaching materials can be useful not only for each individual to focus and confirm aspects that were difficult to understand, but also for individuals with different levels of progress and for those who chose to continue to work outside of classes.

In order to improve, it is essential to upgrade equipment in the practice rooms and facilitate internet site for publications, while creating the desired teaching materials. Due to lack of knowledge in garment making and the names for each parts of clothing, there were some cases where start of the class were delayed and garments made in a misguided way. One way of remedying this issue is to liaison with other subjects so as to provide students with opportunities to learn the basics of clothing before the start of their practical training. Furthermore, our goal is to form an organic linkage between lecture and practical courses through collaboration and information sharing among the faculty, and thus enhance the quality of the learning.